

保育内容「環境」の指導のあり方

- 授業アンケートをもとに自然とかかわる保育環境を考える -

大橋 英子

キーワード：保育内容、環境、動植物、生き物

1. はじめに(環境について)

幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園教育の基本において「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」と示され、幼稚園教育の環境構成が重要視されている。幼稚園教育要領「環境」の領域では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」という観点から、以下のような三つのねらいが掲げられている。1)

1. ねらい

- (1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ
- (2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする
- (3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったり関わったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

また、その内容は 11 項目が示されているが、本稿においては、次に示す自然環境とのかかわりの重要性が記載されている四つの事項を中心に、保育内容「環境」における指導の在り方を明らかにしたい。

2. 内容

- ・自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ・季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ・自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
- ・身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

2. 子どもたちを取り巻く環境の変化

幼稚園や保育所において、乳幼児を取り巻くあらゆるものが環境であるが、昨今の子どもを取り巻く環境の変化は自然体験の乏しさが顕著に見られる。

以前勤務していた幼稚園で関わってきた子どもたちを取り巻く環境では、核家族化や少子化、情報化などが見られる中、地域には、子どもたちの身近に自然環境はあるに

も関わらず、自然と触れ合うことや戸外で遊ぶことも少なく、テレビやテレビゲームなど情報機器による間接体験が多い生活になっていた。こうした子どもを取り巻く環境の変化に伴って、子どもたちは身近な自然環境に興味を示さず、小動物に触れることができなかったり怖がったりする子どもや園庭の草花にもあまり関心を示さず、水遣りもなど保育者に指示されて取り組むといった子どもも少なくなかった。

子どもたちが身近な自然環境に興味や関心を持ち、五感を働かせながら体験を重ねていくことができる魅力ある豊かな環境の工夫や子どもの心の動きを受け止め、ともに感動し、言葉をかける保育者の援助が必要であったと考える。また、これらは保育者の存在が問われることであり、いかに保育者が子どもと自然環境とのかかわりを促していくか、また、保育者自身が自然体験を多く持ち、その豊かさを感じる感性を持ち合わせているかということが求められることでもある。

3. 自然とかかわりを深める保育者の役割として

子どもと自然とのかかわりを深める保育者の役割とはどのようなものなのか、浅見均・河合光利(2012)「子どもの育ちを支える子どもと環境」2)を参考にし、以下にまとめた。

①人的環境としての保育者

保育者の存在は、子どもにとって何より「心の拠り所」として大きな存在である。子どもと保育者の間に大きな信頼や安心があることで、子どもはそれを拠り所にしながら、

自らの行動を広げていく。心の拠り所があるからこそ、子どもは身の回りに存在する事象に興味や関心を広げていくことができる。自然とのかかわりも当然、この延長上にある、子どもとの信頼関係をしっかりと築き上げていくことが自然とのかかわりを生み出していくのである。虫嫌いな子どもであっても、保育者が側で寄り添いながら、恐る恐る手に触れていくと、次第に虫に触れるようになることもある。

②コーディネーターとしての保育者

子どもと自然との出会い、これをどのように作り出していくかがコーディネーターとしての保育者の役割になる。子どもには「こんな体験をしてもらいたい」「こんな感動を抱いてもらえたら・・・」と思うことこそが子どもと自然環境との出会いを創ることになる。それはすなわち「子どもには、このように育ってもらいたい」という保育目標を示していくことに他ならない。そのためには、どのような場所で、どのような内容で自然との“出会いを”を創るかが保育者の役割になるのである。

③子ども同士のかかわりを促す保育者

保育者はとにかく援助をし続けなければならないというものではない。子どもの成長発達の状態に合わせて援助のあり方を変えていく必要があるのである。子どもの年齢が低くければ、保育者の援助も多くなるが、子どもの成長発達に従って、その援助は少なくなっていくべきものである。いつまでも保育者が手を加え過ぎると子どもはとにかく“依存的になりやすく、「できない」「やって～」といった言葉を口にするようになる。どこまで援助をして、どこから見守るべきか、その”頃

合い“を見計らってかかわることが望ましいかかわりといえよう。最後には保育者の手を離れ、子どもら自ら、あるいは子ども同士で活動が展開できるようになることが必要なのである。すぐに保育者の援助を求めるのではなく、自ら進んで対処にかかわっていく、あるいは子ども同士であれやこれやと意見を交わしながらまた、ときにはぶつかり合いながらも対象に関わっていくことが大切なのである。

と述べている。

保育者は子ども一人ひとりと信頼関係を築き、子どもの思いに寄り添い、一緒に考えたり、アドバイスしたり様々な役割を果たしているが、友だちとの関係の中で育つことも多い。さまざまな環境にかかわる中で、自分とは違った考えに触れたり、刺激を受けたりしながら、また新たな思いで関わることができ、遊びが広がっていくことがある。保育者の役割はこのような様々な人とかかわる機会をどのように作り、どのような育ちを願うのか、しっかり考えた環境にしていくことが大切であると考える。



写真1:夏野菜を育てている様子

4. アンケート調査について

子どもと自然とのかかわりでは、保育者の役割が大変重要である。保育者が自然に多く触れ、自然の豊かさを感じる感性を持ち合わせていなければならないが、本学における保育者を目指す1年次の学生達の日常の姿としては、自然とかかわる機会が多いとはいいいがたい。そこで、学生の自らの育ちの過程や日常生活の中で自然環境とどのくらいかかわっていたのか、その現状と課題を明らかにし今後の指導にいかしていきたいと考え、次のような項目でアンケート調査を行った。

自然環境の中でも主に「身近な動植物とのかかわり」に焦点をあてた。すべて自由記述式である。(54名の回答者)

質問1:あなたは子どもの頃、どのような遊びをしていましたか。

質問2:あなたは子どもの頃、植物を育てたという経験はありますか。

質問3:子どもの頃に、小動物を(虫や昆虫・魚など)飼っていましたか どのような小動物でしたか。

質問4:育てていたものが死んでしまった場合にどのように向き合いましたか。

質問5:あなたが自然環境で心を揺さぶられる時はどんなときですか。

質問6:自然を遊びに取り入れることで子どもに育つものは何だと思いますか。

質問1については、次の通りである(表1)。

表1 遊びの種類

	遊びの種類			
室内遊び	ままごと	21	ごっこ遊び	11
	お絵かき	5	人形遊び	5
外遊び	泥遊び	21	鬼ごっこ	14
	砂場遊び	9	色水遊び	6
	公園	5	縄跳び	3
	ドッチボール	2	ドロケイ	2
自然遊び	魚とり	3	虫捕り	3
	ザリガニ捕り	3	川遊び	3

図1から子どもの頃の遊びにおいては、
 戸外遊びだけでなく、ままごとやごっこ遊び
 (お姫様やお店屋さん)など室内遊びを多く
 していたことがわかった。これは、本学学生
 の女子の割合が多いということも影響してい
 るのかもしれない。

戸外遊びでは泥や砂場や色水といった
 自然の素材に触れたあそびが多く、直接体
 験を通して五感を働かせた遊びを体験して
 いる学生も多くいることがわかったが、生き
 物に触れて遊ぶ体験は少ないという結果と
 なった。

幼児期において小動物とかかわりをもつ
 意味は大きく、その環境を作り、いかしてい
 けるかどうかは保育者にかかっている。小動
 物とかかわりの体験がない学生に授業を通
 して、どのようにして幼児期に小動物とのか
 かわりを持たせ親しみを持って接し、生命の
 尊さに気づかせたり、いたわったり、大切に
 する気持ちを育てていくのか、体験型授業
 の工夫が課題である。

質問2については、次の通りである(表2)。

表2 花や野菜の種類

	花や野菜の種類			
花類	朝顔	25	チューリップ	18
	パンジー	7	マリーゴールド	6
	ひまわり	3	ホウセンカ	3
	あじさい	3	コスモス	3
野菜類	プチトマト	23	さつまいも	10
	きゅうり	7	ジャガイモ	5
	大根	3	人参	3
	イチゴ	3	茄子	
	ピーマン		たまねぎ	

花、草、野菜などは、子どもたちにとって
 最も身近な自然環境の一つといえる。質問
 2については、学生が子どもの頃を思い出
 して挙げた植物は、朝顔、チューリップ、パ
 ンジーなど身近なものが多かった。

また、野菜ではプチトマト、さつまいもが
 多く挙がっていた。幼稚園や保育園、学校
 などで見たり、触れたり、育てたりしてきた体
 験が大きく影響しているのではないかと考え
 る。

園内で育てられている花や野菜、また道
 端や園内に自生する草花など、すべてが子
 どもたちには環境である。一つひとつの植
 物には名前があり、特徴がある。そして、子
 どもたちは、特徴をいかした遊びのおもしろ
 さや不思議さを感じていく。植物を育てるこ
 とで好奇心や探究心も養われ、自分たちが
 育てた野菜を食べることで野菜のおいしさ
 や大切さを知ったり、命の循環性を感じ取っ
 たりしていく。保育士として様々な植物の名
 前や特徴などを知っておくことは大事である
 が、花や野菜を育てることで得る、育てるこ

との難しさ、愛おしさ、喜び、野菜のおいしさなどを感じとっていく体験が重要と考える。子どもたちにとって身近な自然に、どうかかわりを持たすのか見通しを持った保育環境を構成していくのは保育者次第である。

質問3については、次の通りである(表3)。

表3 小動物の種類

	小動物の種類			
昆虫類	カブトムシ	25	くわがた	12
	バッタ	2	かまきり、 ありなど	
魚類	金魚	23	めだか	6
	魚	4		
爬虫類	かめ	4	ザリガニ	6
甲殻類	おたまじゃくし	4	かえる	4
両生類				
げっば類	ハムスター		青虫	
蝶蛾類の 幼虫		4		3
その他	かたつむり		インコ	
	にわとりなど			

また、学生が幼小の頃、自然とどのようなかわりをしていたのか、特に小動物とのかわりを明らかにしたいと考えた。質問3の結果より、学生は幼い頃、様々な小動物にかかわっていたことがうかがえる。

特にカブトムシ、クワガタ、金魚が圧倒的に多い。手間のかからない観察や管理がしやすい小動物が飼育されていた傾向が見られる。記述の中に、「夜店で買ってきたもの。」「店で買ったものを飼育した」「もらったから」という回答があった。たしかに、昆虫や魚類

などはなかなか捕りに行く場所もないところが増えているため様々な生き物を身近で触れるということが難しくなっているといえる。しかし、買ってきた生き物でなく、どんな小動物でもいい身近にいる生き物に出会い、子どもたちが「何だろう」「面白そう」と心を動かして、ながめたり、触ったりして遊ぶ環境づくりが重要なのである。時には、どうしたら捕まえられるか試行錯誤しながら、やっとの思いで捕まえる。そして、それをクラスに持ち帰って「見つけたよ」「捕まえたよ」と友達や先生に見せにくる。このような感動体験があるからこそ、「毎日、触れ合いたい」という思いからできるだけ住んでいた環境に近いようにして育てようと図鑑で調べたりして知識を得ていく。また、どのようにして接していったらよいのかも考えながら育てていく。こういった小動物との触れ合いによって愛着や親しみが育まれていき、生き物を大切にできるのではないかと考える。そうした場面に、保育士は人的環境として重要な役割を担っているといえる。



写真2:うさぎとふれ合っている様子

質問4についての記述式の回答は以下の通りである。

表4 小動物の死にどのように向き合ったか

・土に埋めてあげた。お墓を作った。葬った。	11
・とっても悲しくて泣きました。親と一緒に土に埋めました。	5
・冷静に、素直に受け入れる。	4
・あまり覚えていない	4
・ずっと泣き、最後にありがとうと伝えて見送った。	4
・とても悲しかった	4
・現実と向き合おうとした。	2
・校庭の隅に埋めて、手を合わせて「また会おうね」といった。みんなでお別れをした。	2
・信じたくないけど、信じないといけないという気持ち	2
・命を大切にしないといけないと思った。	2
・次はもう少し長く生きられるようにしようと思った。	2
・びっくりして怖くなった。死んでなくなることをうまく理解していなかった。	2
・覚えていない。向き合っていないなど	

保育者としては、子どもたちが生き物とのかかわることで命の大切さを知ってほしいという思いがある。将来、保育者となる学生は飼っていた生き物との死に、直面したことがあるのだろうか。また、その時どのように感じたのであろうか。「命」に対する学生自身の考え方を把握するためアンケート調査をし、

小動物の飼育と子どもたちのかかわりから命を大切にする心を育む指導の在り方検討していく。アンケートの結果としては「土に埋める」「お墓を作る」といったことが記述されていて、その中には、「土にかえるんだよ」と親に教えてもらったので土に埋め、「ありがとうさようなら」と思いながらお別れした。といった内容が記述されていた。また、「これからもう少し長く生きられるようにかかわる」など死を理解し、「もっとこうすればよかったのかなあ」といった反省をするなど死を受け止める経験の記述もあった。飼育していた生き物の死を通し、命の大切さを感じ取っている学生もいたが、「死を理解できていない」「覚えていない」記述もあり、命を大切にする心とはどのようなものなのか、学生同士で話し合う機会を持つことも必要であると考え

4. N市内の幼稚園における保育内容の実

筆者が以前勤務していた幼稚園における保育実践について、小動物に関する幼児のかかわりにおける事例を取り上げる。

事例1:生命の営み

飼育していた生き物が死んでしまった時に、子どもたちと一緒に園庭の隅っこにお墓を作り、子どもたちが持ってきた、たくさん

き物を仲間としていたわり、別れを惜しむ気持ちを感じている姿がみられた。また、飼っていた魚が死んだときは「川に返してやろうよ」と言った子がいて、その子の思いを大切に、みんなで川にそっと返しに行ったこともあった。

この事例から、発達年齢にもよるが、死んだら「お墓に埋めよう」だけでなく、子どもの気持ちに寄り添い、子どもの考えを受け入れながら、大切に葬ることも「心」を育てることになるのではないかと考える。

事例2:小動物とのかかわり

幼稚園では、6月頃になると家の近くで見つけたザニガニやオタマジャクシなどの小動物を園に持ってくるようになる。生き物にかかわることは、命あるものを大切にしたり、世話をしたりすることを単に教えるだけではない。「どうしてだろう？不思議！」と知的好奇心を膨らませ「なぜだろう？」と疑問を持ったり「すごい！」と感動したり、喜んだり悲しんだりするなど様々な感情体験を積むことで、より、生き物に親しみを深め、命あるものとのかかわりを大切にできるようになる。

5歳児クラスの子どもたちがザリガニの飼育をしていたある日、川でとってきたドジョウをザニガニと遊ばせようとケースに入れたことで、ドジョウがザニガニに食べられてしまったことがあった。この出来事は、子どもたちにとっては大変ショックなことであった。しかし、子どもたちにとっては貴重な体験となった。「なぜ？ドジョウを食べちゃうの」「ザニガニはドジョウを食べるんだ。」「どうしたらいいの～」「おおなかがすいていたのかなあ」と不思議に思ったり、驚いたりしている姿があ

った。子どもたちは、こんなこともあるんだなあとしばらくの間、じっとザニガニの様子を見ながら考えているようであった。このことがきっかけで、子どもたちは子どもたちなりに、これからどのように飼育していけばいいのか、ザニガニは何を食べるのか、もっといい方法はないかなど図鑑で調べたり、友達と考え合ったりする姿が見られるようになった。このことはザニガニもドジョウもどちらも「生きている」ということを実感し、命の大切さを感じることができたのではないかと考える。

また、共感できる友達の存在や、思うようにならないことを話し合う仲間の存在があることで生き物と向き合い、様々な問題を解決することができたと考える。教師にとっても、食物連鎖や自由を奪う飼育について考えさせられることでもあった。

これらの事例から、生き物とかかわっていく中で、悲しんだり、かわいそうといった気持ちになったり、また、弱ってきた生き物を見つけて心配したり、その時々で「どうしたらいいんだろう」と、みんなで考えたりしながら、心を揺さぶられる実体験をたくさん積むことで、生き物への愛情を感じ、生き物への思いが変わっていき、生き物とのかかわりが、やさしさや思いやりの気持ちの芽生えとなっていくのではないかと考える。命の大切さやいたわりは言葉で指導することは難しいがこうした生き物とのかかわりを通して心を揺さぶる体験から育まれてくると考える。学生にもこのような心が揺れる体験学習を通した授業の在り方を考えていきたい。

質問5についての記述式の回答は以下の通りである。

表5 心が揺さぶられる体験

・花や木、草の匂いをかいだ時、きれいだった時	11
・きれいな景色を見た時	7
・季節の移り変わりを感じた時	6
・きれいな景色を見た時、夕日、星空、空等見た時	6
・自然現象を見た時(虹、花につく雨のしずく等)	4
・季節に出てくる小動物を見た時	4
・雪がたくさん降った時	4
・大風なった時	3
・花見、月見などの行事	2
・山登り、露天風呂、ひなたぼっこ、地震で人が亡くなった時、小動物の脱皮等	

将来保育者を目指す学生が自然に対して心を揺さぶられる体験は、どのような体験であるのか本学1年生を対象にアンケートをとった。学生は、都市化、情報化が進む中で生活していて、身近な自然に目が向かなくなっているのではないかと心配される。

自然環境では動植物、風や雨、雪などの自然現象土や水、石などの自然物、月、太陽などの天体、が含まれている。アンケートからは、花や木、草の匂いからが多く、また、季節の移り変わりや夕日、星空を見た時など、学生が心を揺さぶられたのは、ほとんどが五感を通して感動していることが分かった。視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚などを働かせ、自然に感動するなど、自然に対する感性を持ち合わせていることが分かった。

このことは、保育者になるうえで重要なことであるが、子どもたちの感性を育むということでは、学生自身がもっと自然環境にかか

わり、感性を磨く努力をしなければならないと考える。

質問6についての記述式の回答は以下の通りである。

表 6 自然を遊びに取り入れて育つもの

・自然の怖さや、大切にする気持ち	14
・豊かな感性	10
・命の大切さ	10
・好奇心、興味を持つ力	6
・季節の移り変わりを知る	5
・思いやり	4
・想像力	3
・心の落ち着き、開放感	2
・五感が刺激される	2
・感謝、観察力、知識等	

保育者は、保育環境を構成する力が重要である。特に子どもたちと自然とのかかわりは大きな意味があるが、学生が子どもと自然とのかかわりの中で培われるものは何かを理解しているかどうかの質問6のアンケートの記述は、「自然の怖さや大切にする気持ち」、「豊かな感性」、「命の大切さ」の記述が多く挙がっていた。

このことは知識や思いとしては理解しているが、子どもと自然とのかかわりから、このような学びを子どもに培っていけるように、環境の工夫、援助の工夫が必要になる。それらはすべて保育者にかかっているといえ、保育者としての重要な役割である。

5. 生き物とのかかわりから育つものとは

子どもの身近にあり、触ったり抱いたりで

きる小動物とのかかわりを通して育まれるものとして、小田豊・湯川秀樹(2009)「保育内容環境」3)を参考にして以下にまとめた。

① めくもりを感じ心のひだをはぐくむ。

困難にぶつかったり、気持ちの処理がつかかねているとき、口を利くわけでもない小動物に、思いがけなく慰められることがある。幼稚園では、泣いて登園してきた園児が園で飼っている小動物に出会い、いつの間にか泣きやんでいくということがよくある。このことは、言葉で言って理解できるのではなく、体験し、身をもって感じて獲得していくものであり、貴重な心のひだの1つとなっていく。

② 生き物について知り、生命の尊さを感じる。

小動物を飼育する営みは、小動物と遊んだり、エサを与えたり、ケースやかごを掃除したり、毎日触れ合うこととなる。その中でけがや病気、様々な出来事があり、毎日触れ合っている小動物を命あるものとして受けとめていく。生き物への愛着や思いやりなど様々な感情が揺さぶられ、幼児にとって大切な心のひだ形成され生命の大切さが育まれていく。

③ 客観性を育む

子どもにとって、自分より小さな動物や昆虫は魅力的で興味・関心をひく対象であり、自分の物にしたくなる。しかし、子どもはそれらを自分の思い通りにしようとしても思うようにならなかったり、死なせてしまっていやな気持ちを味わったり

する。そして、様々な経験をする中で、小さな昆虫や動物であっても生き物にとって生きていくうえでふさわしい環境があることを感じとっていく。また、思いどおりにならないことを学んでいく。飼育している小動物の世話も、小動物にとってどのようにするのがよいかという客観的な目が育ってくる。

④ 自然の循環性を感じ取る。

子どもたちが毎日小動物を飼育していく中では、赤ちゃんの誕生に出会うこともある。また、病気やけがになり死んでしまうことを経験することもある。そこで子どもたちは命の不思議さや驚きを感じていくなかで生き物の歩み、次の世代への歩みを感じていく。

⑤ 知的好奇心を揺さぶり探究心を育む

小動物とかかわり、「何だろう」と知的好奇心を揺さぶられ、自分の経験や体験を思いうかべたり、図鑑でしらべようとするようになる。そして好奇心を広げ「もっと知りたい」「こうなるとどうなる」などによく見ようとする。そして新しい発見をし、さらに感動をする。このような経験を繰り返すなかで探究心は育まれていく。

人間形成の基礎を培う幼児期に身近な自然に目を向けさせ、自然に対する不思議さ、美しさ、生命の尊さなどに直接触れる体験を通して、心に感じる力を育てていくことは豊かな感性や知的好奇心を育み、探究心につながっていくと考える。

6. まとめ

幼稚園教育要領解説の環境「内容の取り扱い」に「幼児は大人と違って、自然を目の前にすれば、おのずと自然に目を留め、心を動かされるとは限らない。教師自らが感性を豊かに持ち、自然とその変化のすばらしさに感動することや幼児がちよつとした折に示すささやかな自然へのかかわりに共鳴していくことが大切」4)とある。

子どもたちが、自然に目を向けていけるようにするには、園の自然環境の工夫は重要であり、特に、自然の中でも、動物や植物を飼育したり、育てたりと命の大切さを感じる重要な環境である。保育者には、日々、様々な動物や植物との出会いを通して、主体的にかかわり、様々な感動を味わったり、命の大切さを知ったり、思考力を働かせたりしていけるような場を積極的に作っていくことが求められる。

また、子どもがどのように動植物とかかわっているのか観察し、共に喜んだり、悲しんだり、驚いたり、一緒に考えたりしながら子どもの体験がさらに豊かな体験となるように見守っていくことも求められる。保育者をめざす学生の幼少期の環境や経験、動植物に対する意識から、将来、子どもたちと一緒に動植物としっかりかかわる保育実践の展開につながるのか危惧する。

まず、学生自身が日頃から身の回りの自然にふれ感性を豊かにし、自然の多様さに気づいていくことであるが、学生の段階から小動物や植物と触れ合う経験ができる環境を養成教育の中に取り入れていくことが必要であると思われる。

子ども学科・教授(幼児教育学)

引用文献:

- 1) 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領
幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容、
平成 29 年3月告示、萌文書林
- 2) 浅見 均編著者 河合光利著者
『「子どもの育ちを支える」子どもと環境』
3 章 2-1 大学出版社、2012 年、P39～P41
- 3) 小田 豊,湯川秀樹編著『「新 保育ライブラリ保育の内容・方法を知る」保育内容 環境』
北大路書房、2009 年、P97～P99
- 4) 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成 11 年 6 月』平成 11 年、フレーベル館、P105